ラオス地域研究のための基本文献

〈事典・工具書〉

・桃木至朗ら編 『新版　東南アジアを知る事典』 平凡社　2008 年

東南アジア全般についての事典であるが、巻末の国別概要に各国の状況がコンパクトにまとめられており便利。参考文献やその他の資料も有益。

・岩波書店辞典編集部編 『岩波　世界人名大辞典』 岩波書店　2013 年

ラオスの歴史的人物から現代の政治家まで 55 名が掲載されている。日本で出版された辞典で、これだけの数のラオス人が掲載されているのは初。

〈入門・概説書〉

・菊池陽子、鈴木玲子、阿部健一編 『ラオスを知るための６０章』 明石書店 2010 年

ラオスの入門書として、最初に手に取っていただきたい本。自然、生活と生業、環境と開発、歴史、経済、政治と外交、宗教と儀礼、言語と文学、文化の 9 つの分野から、ラオスを多面的に理解できる。２０１２年に刊行された第２刷の利用を勧める。

★2 刷は、請求記号：A/302/1022/85、図書 ID：0000709344

・ラオス文化研究所編 『ラオス概説』 めこん　2003 年

ラオス人と日本人の研究者による共同執筆で、ラオス全般について解説されている。現在入手困難なため、図書館での利用を勧める。

〈歴史〉

・マーチン・スチュアートーフォックス（菊池陽子訳） 『ラオス史』 めこん　2010 年

ラオス研究の第一人者によるラオス通史。ラオス語以外で書かれた初のラオスの通史でもあり、古代から 2008 年までの歴史が記述されている。ラオス史の全体像を俯瞰するには欠かせない一冊。

・竹内正右 『ラオスは戦場だった』 めこん　2004 年

フォトジャーナリストの著者が撮影した 1973 年から 1982 年までの記録。ラオスがもっとも揺れ動いた時期を貴重な写真を通して理解できる。

〈政治・経済〉

・カム・ヴォーラペット（藤村和広・石川真唯子訳） 『現代ラオスの政治と経済』 めこん　2010 年

在外ラオス人による 1975 年以降のラオスの政治、経済分析。最後に、在外ラオス人の視点から、今後のラオス発展のシナリオが予想されている。

〈専論・研究書〉

・矢野順子 『国民語の形成と国家建設 －内戦期ラオスの言語ナショナリズム』 風響社 2013 年

ラオスの言語ナショナリズムについて詳細に論じた研究書。ラオス文字の読み書きができるようになってから読むと、より理解が深まる。

・山田紀彦編 『ラオスにおける国民国家建設』 アジア経済研究所 2011 年

主として政治、経済の分野から現代ラオスを分析した論文集。内容が専門的であるので、ラオスの歴史、政治、経済の概要を一通り頭に入れてから読むことを勧める。

・プーミー・ヴォンヴィチット（平田豊訳）『激動のラオス現代史を生きて－回想のわが生涯』 めこん 2010 年

ラオスで副国家主席を務めた著者による回想録の翻訳。ラオス語から翻訳された文献は非常に少なく、ラオス革命の進展とともに、著者の行動や思想を理解できる貴重な書。

・横山智、落合雪野編 『ラオス農山村地域研究』 めこん 2008 年

社会、水田、森林、生業の 4 つの分野から変わりゆくラオスの農山村を描写。ビエンチャンを見ているだけでは見えないラオスの姿を知ることができる。

・西澤信善、古川久継、木内行雄編 『ラオスの開発と国際協力』 めこん 2003 年

様々な分野でラオスの援助に関わっている専門家が、各分野の現状を紹介し、今後の課題について論じている。援助の概要について理解するのに便利。

・安井清子 『空の民(チャオファー)の子どもたち』 増補改訂版 社会評論社 2001 年

著者は、難民キャンプでの図書館活動を通じて、ラオスのモン族の民話採集、出版を長年行ってきた。本書からは、難民、援助、支援などについて深く考えさせられる。

（2013 年 9 月 文責:菊池陽子）